

□原著論文□

理学療法学科 2 年前後期末での学習と生活面の満足度変化

久保 晃¹ 韓 憲受¹ 貞清 香織¹ 黒澤 和生¹ 丸山 仁司¹

抄 録

目的：学部 2 年前後期末の期間における学習と生活満足度変化を明らかにすることとした。

対象と方法：対象は、平成 26 年 7 月に国際医療福祉大学理学療法学科 2 年に在籍し、調査に協力の得られた 99 名（男性 56 名、女性 43 名）とした。2 年前期末と後期末に Visual Analogue Scale で評価される満足度を検討した。

結果：いずれの時期にも男女とも、学習より生活満足度が高く、学習満足度は後期末に低下したが、生活満足度は維持されていた。

結語：2 年末には学習面満足度が低下する可能性があり、さらに追跡調査をする必要がある。また、このことを考慮し、学習支援を意識して、規則正しい生活、睡眠のリズム、オンとオフをはっきりさせる生活のメリハリなどの対策を講じる必要がある。

キーワード：学習満足度、生活満足度、理学療法学科 2 年生

Second-year physical therapy undergraduates' satisfaction with learning and life at the end of first and second term

KUBO Akira, HAN Heonsoo, SADAKIYO Kaori, KUROSAWA Kazuo
and MARUYAMA Hitoshi

Abstract

Purpose: To clarify changes in physical therapy students' satisfaction with learning and life at the end of the first and second term in their sophomore year of college.

Subjects: Subjects comprised 99 second-year physical therapy students (56 males, 43 females) enrolled at the International University of Health and Welfare, who completed surveys at the end of the first and second term in 2014.

Methods: Students were asked to mark their satisfaction with learning and life since entering university on a Visual Analogue Scale at the end of the first and second term of their sophomore year. Satisfaction levels were compared with two terms.

Results: Life satisfaction was significantly higher than satisfaction with learning. Although satisfaction with learning declined significantly at the end of the second term, life satisfaction was maintained.

Conclusion: It is necessary to implement measures to address this decline such as establishing a more regular schedule, sleep cycles, pace of life and balance between work and leisure.

Keywords : satisfaction with life, satisfaction with learning, sophomore physical therapy student

I. はじめに

理学療法士養成における学生の満足度に関しては、総合臨床実習（以下、インターン）に関する報告¹⁻⁷⁾が多い。インターンは通常最終学年で経験する。慣れ

親しんだ学校を出て、6 週間程度施設の中で理学療法に関連する実体験を積む。学生は心身ともに特別な緊張感に包まれることから、研究の対象となりやすい。一方、通常のキャンパスライフについて検証してい

受付日：2015 年 7 月 1 日 受理日：2015 年 8 月 25 日

¹国際医療福祉大学 保健医療学部 理学療法学科

Department of Physical Therapy, School of Health Sciences, International University of Health and Welfare
akubo@iuhw.ac.jp

るものは少ない。インターンのようなインパクトは乏しいと推測されるものの学部4年間は様ではなく、各学年、期ごとに特徴が存在すると考えられる。

久保ら⁸⁾は、Visual Analogue Scale (以下、VAS)を用いて学部3年末と4年末で学習および生活満足度を比較した結果、4年末で男性の生活満足度が有意に低下し、低下群では向上群に比べ国家試験成績が有意に低かった。このことから、男性に対しては生活面満足度が低下することを考慮して対策をとる必要があると述べている。

さらに3年次末で、東日本大震災発生から3年間の変化を出身地域も含めて、学習および生活満足度を報告している。大震災発生年の学習満足度のみに有意に低かったが、生活満足度は学習に比べ一貫して高く、ほぼ一定で、出身地域別の傾向は認められず、学習満足度の低下に反映した震災年によるものと推測される影響は翌年から回復していたと考えられる⁹⁾としているものの、横断研究であり、満足度を縦断的に追跡して傾向をより明確に把握する必要がある。

以上の報告で、3年次以降のVASによる満足度の傾向は、学習満足度で55ポイント前後、生活満足度で70ポイント前後と報告され、実態が明らかになりつつあるものの、この時期以前の入学から2年末までの状況は明らかになっていない。

そこで本研究の目的は、学習面と生活面で、VASを用いて2年前後期末での満足度とその満足度がどのように変化するかを追跡し、縦断的に明らかにすることとした。

II. 対象と方法

1. 対象

平成26年度に国際医療福祉大学保健医療学部理学療法学科2年に在籍し、調査に協力の得られた99名とした。後期末調査実施時の年齢の平均±標準偏差は20.3±2.7歳であった。男女別対象者数と年齢の平均±標準偏差は男性56名、20.0±0.7歳、女性43名、20.8±4.0歳であった。

2. 方法

入学から2年前期末までと後期末までを振り返っての学習面全般にわたる満足度(以下、学習満足度)と生活面全般にわたる満足度(以下、生活満足度)の学生による評価を記名式でVASを用いて実施した。学習や生活というものは具体的にどのようなものを指すか、についての説明は実施しなかった。先行研究^{8,9)}と同様、左端に全く不満足、右端に大いに満足とした100mmの直線上に縦に印をつけさせ、左端からの距離(mm)をポイントとした。なお、2年前期末の調査は平成26年7月25日に、後期末の調査は平成27年1月20日に学年担任が行った。

3. データ分析

満足度の比較はWilcoxon符号付順位検定、性差はMann-Whitney検定を用い、有意水準は5%とした。

4. 倫理上の配慮

調査実施に先立ち、倫理的な配慮として、研究目的と内容を説明した後に研究参加の同意を得た。また、随時参加を取り止めても成績等に影響しないこと、得られたデータは統計値として用い、研究以外に使用しないことを説明した。

III. 結果

学習満足度および生活満足度とその変化を表に示す。生活満足度は学習満足度のVASのポイントより高かった。

表 2年前期末および後期末での満足度とその変化

| | 全体 | 男性 | 女性 |
|---------|--------|--------|--------|
| 学習満足度 | | | |
| 前期末 | 58±24* | 55±24* | 61±24* |
| 後期末 | 50±22 | 49±25 | 52±18 |
| 変化(後-前) | | -6±23 | -9±20 |
| 生活満足度 | | | |
| 前期末 | 68±17 | 67±18 | 70±15 |
| 後期末 | 66±19 | 66±20 | 67±18 |
| 変化(後-前) | | -1±19 | -3±20 |

平均値±標準偏差

*前期末と後期末の間で有意差あり。

前後期末の比較では学習満足度は全体、男女ともに後期末で有意に低下した。一方、生活満足度は維持されていた。いずれの変化にも性差は認められなかった。

IV. 考察

本研究では、今まで明らかになっていなかった学部2年の満足度を検討した。学習満足度に比較して生活満足度が高く、学習満足度は50~60ポイント前後、生活満足度は65~70ポイント前後であり、2年前期末で既に3年次以降と同様の傾向が存在することが明らかとなった。しかし、2年前期末と後期末の比較において学習満足度には後期末で有意な低下が認められた。つまり、2年後期末で学習満足度は一端低下し、3年で回復する特徴が存在する可能性があることが示唆された。この2年後期末で学習満足度の低下は前期からの追跡結果であり、本研究の対象者における変化の傾向を反映している。さらに対象年度を拡大して検証する必要がある。また、本研究の対象者で3年での満足度を把握し、裏付けの調査も実施すべきである。

学部2年は大学生活2順目で学年歴のサイクルを経験したため、入学年度より心身ともに余裕が生じる。学習面では基礎的な専門科目を学びつつも、一般臨床医学が多く配置されていること、臨床実習が差し迫っていないことなどがこの結果に影響している可能性がある。

また、2年前期が終了後は夏休みを利用した私的な活動やオープンキャンパスをはじめとする大学行事などへ取り組む時期でもある。さらに、後期の学園祭や部活・サークル活動など2年がキャンパスライフの中心的な存在となり、学業以外での充実感がこれらの結果に関与していることも推察される。

生活満足度は有意な変化は認められず維持されていた。生活満足度は前期末の時点で既に65~70ポイントあり、学習満足度の50~60ポイントに比較しても明らか

かに高く、天井効果も要因の1つとして考えられる。

生活満足度のポイントから、キャンパスライフの充実を窺い知ることができる。一方、学習満足度は低下するため、学習支援を意識して、規則正しい生活、睡眠のリズム、オンとオフをはっきりさせる生活のメリハリなどの支援は必要であることが示唆される。

今回の満足度調査は、単年度かつ大田原キャンパスだけのもので、学年担任が実施したものである。VASに関する結果において、肯定的な偏りが存在する可能性は否定できない。これらの点は本研究の限界である。

V. 結論

2学年後期末には前期末に比べて学習面満足度が低下することを考慮し、学習支援対策を講じる必要があることが示唆された。

本研究における報告すべき利益相反はない。

文献

- 1) 坂本年将. 臨床実習に対して学生が望むこと—アンケート調査より—. 理学療法学 1991; 18(2): 109-113
- 2) 坂本年将. 臨床実習に対する学生の意識—医療技術短期大学部3年生に対するアンケート調査より—. 理学療法学 1992; 19(5): 445-451
- 3) 高橋のり子, 菊地延子, 田中正則ら. 臨床実習学生の要望・満足度・批判. 理学療法学 1997; 24(6): 322-328
- 4) 篠原英記, 坂本年将, 武富由雄. 臨床実習学生の考える臨床実習指導者の学生に対する評価—アンケート調査より—. 理学療法学 1993; 20(2): 82-86
- 5) 坂本年将. 臨床実習における知識, 技術, 人間関係の指導に対する学生の意識—アンケート調査より—. 理学療法学 1992; 19(6): 585-591
- 6) 関裕也, 松本直人, 隆島研吾ら. 学生が満足する実習指導因子の検討. 理学療法学 2006; 33(6): 334-337
- 7) 久保晃, 下井俊典, 石井博之ら. 総合臨床実習に対する学生の満足度と総合臨床実習の現状に関するアンケート調査. リハビリテーション教育研究 2011; 16: 97-98
- 8) 久保晃, 倉本A亜美, 小林薫ら. 理学療法学科3および4学年末の学習と生活面の満足度変化と国家試験成績. 理学療法科学 2015; 30(1): 115-117
- 9) 久保晃, 黒澤和生, 丸山仁司. 東日本大震災後の学部生QOLの年次変化—理学療法科学部生3年末での学習および生活面の満足度から—. 理学療法科学 2014; 29(6): 1007-1009